日本人の木へのこだわりは産業も動かした

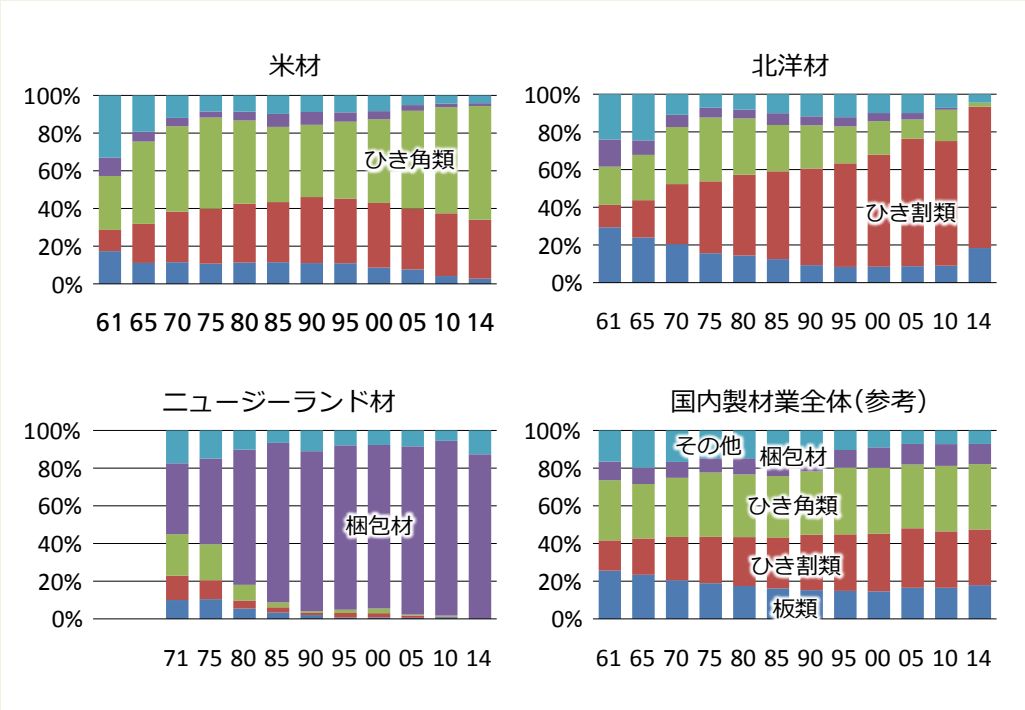

図1　素材の生産地別にみた用途別製材生産割合(1961年～2014年)
どの国・地域からきた素材も、しだいにそれぞれ特定の用途向けに集中していきました。
米材：米国・カナダ産の木材。樹種は多様なものの、今日ではベイマツが中心。
北洋材：ロシア産の木材。北洋アカマツ、北洋エゾマツなど。
ニュージーランド材：ニュージーランド産の木材。主にラジアタマツ。
ひき角類：建築用材の分類の一つ。柱や梁など、いわゆる角材のこと。
ひき割類：建築用材の分類の一つ。垂木(たるき)や胴縁(どうぶち)など、角材よりも細い製材のこと。
板類：建築用材の分類の一つ。屋根下地板や壁下地板など、いわゆる板のこと。
梱包材：商品を輸送中の破損から守るための梱包用製材のこと。木箱、電線用ドラム、パレットなども含む。

日本に古くから伝わる「適材適所」の文化

かの『日本書紀』には、スサノオノミコトが自分の体から抜き取った毛がさまざまな種類の樹木となり、その中で「スギとクスノキは舟に、ヒノキは宮殿に、マキは棺にするとよい」と述べたという一節があるそうです。ことの真偽はともかく、日本人にはこれほど古くから、さまざまな木材をその特長に応じて使い分ける意識があったということになります。このような木材の使い分け、すなわち「適材適所」は、現代日本の代表的な住宅建築工法である「在来軸組工法」にも随所にみられ、日本人の中にいまもしっかり息づいていることが分かります。そればかりか、全国各地の製材産地の姿にも、適材適所の影響が色濃くうかがえることが、最近の研究から明らかになってきました。

製材業・製材産地の発展と「適材適所」

丸太などの「素材(そざい)」を用いて板・角材などの「製材(せいざい)」を生産する産業を「製材業」、そのための事業所を「製材工場」といいます。そして製材工場が多数集まり(集積し)、大量の製材を生産している地域が「製材産地」です。

北海道支所
北方林管理研究グループ長
嶋瀬 拓也

わが国では第二次世界大戦のあと、戦災復興と経済成長のため、製材の需要が著しく高まりました。国内で伐採された木材（国産材）だけではとても足りず、１９６０年代には素材の輸入が拡大します。

その際、興味深い現象が起こりました。はじめのうちこそ、どの国からきた素材からもさまざまな製材が作られていましたが、しだいに「素材の生産地」と「製材の用途」との関係が強まっていったのです（図１）。米材はひき角類、北洋材はひき割類、そしてニュージーランド材は梱包材というように、生産地が同じ木材は、同じ用途に使われるようになっていきました。

さらに詳しく調べると、「製材産地の位置」「素材の樹種」「製材の用途」の間に合理的な関係があることが分かってきました（図２、表１）。例えば富山県には、ロシアから輸入された北洋アカマツ・エゾマツ素材を用いて小割材を生産する製材業が発達しました。北方のロシアから木材を輸入するには日本海側のほうが安くすみましたし、寒冷なロシアで育った木は年輪の幅や節の直径が小さく、小割材と呼ばれる断面（幅と厚さ）が小さな製材の生産に向いていたのです。この例にもあるように、今日みられる製材産地は、他の地域より有利に入手できる木を用い、その木の特徴をよく生かした製材を作ってきたところばかりです。入手しやすい木材を適材適所に使い分けることが、それぞれの産地にもっとも大きな利益をもたらしたためと考えられます。

家具や内装などの特殊な用途向けならともかく、量産規格品が中心の一般建築用材や産業資材を扱う製材業までこれほど細かに分化している例は世界的にも珍しく、日本人がいかに木を大切に使う心を持ち続けてきたかを物語っているといえるでしょう。

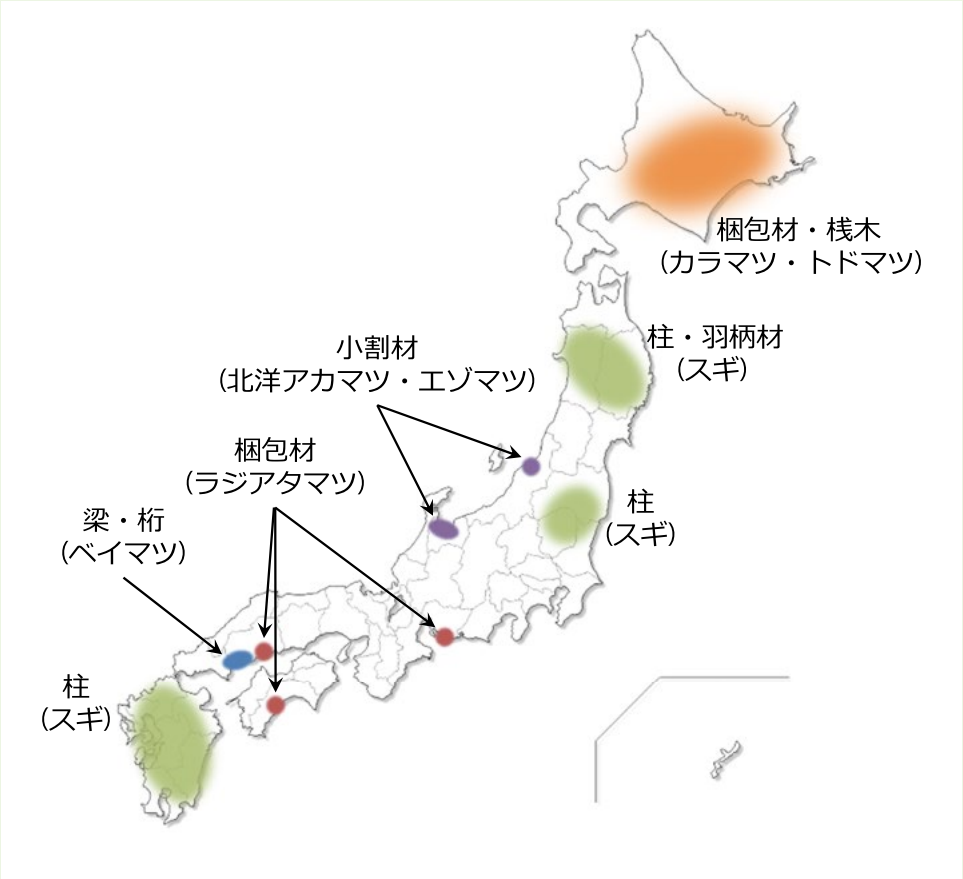

図２　日本の製材産地（2005年頃のようす・一部省略）

表１　製材の用途と主に用いられる素材の樹種
製材の用途ごとに求められる性質を、もっともよく満たせる素材が選ばれています。

製材の用途	求められる性質	主な素材の樹種
柱（ひき角類の一種）	寸法が正確であること、狂わないこと	スギ ヒノキ
梁・桁（ひき角類の一種）	曲げる力に強いこと	ベイマツ
小割材（ひき割類の一種）	細くても折れたり狂ったりしないこと	北洋アカマツ 北洋エゾマツ
梱包材	安いこと、ある程度の強度があること	道産カラマツ ラジアタマツ